昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和57年5月1日発行（毎月一回発行）　ISSN 0285-1873

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 126

●特集　禁断の地の山・ブリクティ

1982 MAY.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

昭和57年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会昭和57年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意志決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。（委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。5月15日まで必着するようお願いいたします。）

記

1. 日時　昭和57年5月30日午後1時
2. 場所　東京都勤労福祉会館
（東京都中央区新富1-13-14）
電話（03-552-9131）
3. 議事
(1) 議案第1号　昭和56年度事業報告について
(2) 議案第2号　昭和56年度収支決算について
(3) 議案第3号　昭和57年度事業計画について
(4) 議案第4号　昭和57年度収支予算について
(5) 議案第5号　役員および評議員の一部補充について
(6) 議案第6号　会員の除名について
4. その他
総会終了後、同会場において講演会を行う予定でおります。講師につきましては目下接渉中でありますのであわせてご出席をくださるようお願いいたします。

表紙写真　ククアール氷河源頭のテイルマンのコル（5,791 m）からバツーラの東に特異な山容のシスパーレ（7,611 m）を望む。　池田清利

ヒマラヤ No.126

1. ヒマラヤ放談 ―― ペマ・ギャルポ
5. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
10. 特集　禁断の地の山・ブリクティ
14. 連載　未踏への誘い(5) ―― 杉本忠男
VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM(3) ―― 朝霧山岳会
ヒマラヤ閑話㊿ ―― 水野勉
24. 事務局日誌・寸感

連載 《33》

ヒマラヤ放談

１９５９年のチベット動乱の中、ダライ・ラマ14世法王猊下と共にインドに亡命した１人の少年がいました。その少年は23年后の今、日本に滞在してチベット文化研究所を主唱している。その人の名はペマ・ギャルポさん、チベット亡命政府の日本代表の方でもある。今日は中国側からのヒマラヤ登山が盛んなおりチベット人からみたヒマラヤなどを伺ってみました。

ペマ・ギャルポ

●チベットから日本へ

はじめにペマさんの略歴をお聞きしたいと思いますが、お生れはどちらでしょうか。

ペマ　私は１９５３年の生れで、チベットの東の方でカム地方のニャロン（新龍）という所に生れました。父は武族でそこの族長をしておりました。今は中国の四川省の方に入っているところです。

そうしますとチベットのカム地方にお生れになられてから……

ペマ　はい、インドに亡命しました。

１９５９年の動乱の時に一緒に亡命した訳けですね。

ペマ　そうです。そん時は勿論まだ子供だった記憶があります。法王猊下の後、私達沢山の人が一緒にインドに亡命しました。

先程からお話しを伺っておりますと大変上手なと言うよりも完璧な日本語を話されますが、日本にはいつこられたのでしょうか。

ペマ　１９６５年の１２月です。それで日本語を勉強したり大学に入るためにそれなりの準備をしました。私、インドに居たときは日本で言ったら中学３年生の高校受験の時に来たんですが、日本では年令によって学校へ行くでしょう。もう一度中学校に入ることになっちゃいました。

日本の大学生活は長かったのですか。

ペマ　亜細亜大学に４年間居てそれから上智大学で１年半国際政治学を学び、東京外語大の研究生として約１年ちょっとです。

このチベット文化研究所はペマさんがお創りになられたのですか。

ペマ　私が創ったと言うと大袈裟になりますがどちらかと言えば先生方や有志の方々の力で作った訳けですが当初から関りはもっていました。

開設されてからどのくらいになるのでしょうか。

ペマ　今年で一応ちゃんとした形をとって７年目です。

最初から基盤はここだったのですか。

ペマ　いや、そうじゃないです。最初、私が大学にいる時にチベット問題研究会と言うのをやってまして最初は同好会のようなものでしたが、だんだんとこうチベット問題をやるにしてもチベットそのものが判らないとチベット問題はできないし、それからチベット問題をやるとあの政治的な部門となるものですから、又、その政治的なものとなると非常に上べ的なものが大きくて基礎的なものがなかなか勉強できないし軽視する向きがある。それよりももっとなんか深いものと言ったら

それぞれの民族の文化を勉強するのがいいんじゃないかと言うことでチベット文化研究会と言うことになりました。

●チベットの秘境とは？

ペマさん自身幼少の頃にインドへ出てしまっているので難しいかも知れませんが今、チベット人が考えるチベットの秘境といったらどんなところでしょうか。

ペマ　まずね、あの～これはチベット人にとってもまだ未開の所がチベットの中にも沢山あるんですよ。これは私自身子供の時に逃げてきてますが、もうチベットの自然そのものに対しては今でも一番恋しく思っております。世界でも知らないところが沢山あるんでしょうけれどもチベットに於いては特にそのヒマラヤと言う雪に囲まれている雪の国と言うイメージとは全然違うあの自然！例えばね水晶ばっかりの山があるんですよ。僕なんか逃げてくるときに遠く眺めるとキラキラと輝いているんですよ。あんな美しい所は今でもみたことがありません。

それからもう一つ秘境として僕はチベット人の考えかたそのものの中に世界の人々が判ってくれないものが沢山あると思うんです。それは、まあチベット人の価値感でもあるし、私なんかがいつも思うのは私達が例えばおいしいとか良い悪いと言う時にそれぞれなんらかの概念をもってなんらかの尺度で計ってるわけでしょう。その計る時にそれまで自分が育った文化的環境・体験に依ってそれが違ってくると思うんですよネ。例えば日本人はチベット人が風呂に入らないからある人にとっては非文化的だと言うかも知れないし、チベット人は日本人は生の魚を食べるから野蛮だと思うかもしれない。それは、やはりそれぞれの文化にかくれてる潜在意識と言うものがあると思うんです。そう言うものはチベット人の価値感としてもっともっと外国の人達が理解しようとすれば、若しかしたら私達は幸福と言うものについての概念と言うかもっと素朴な概念を皆さんに提供できるのではないかと思ってます。これは一つにはチベットの自然の美しさと言うことと「心」チベット人一人一人が考えてること素朴な考えかただけれどその中に幸福感がある。若しかしたら他の民族、他の人達にとってもなんか探り出せば役に立つものがあるんではないかと言う気持を持っている。

ご存知かと思うんですが中国側からのヒマラヤ登山と言うものが登山界の中で物凄いブームを呼んでいるんですけれどもこれらヒマラヤにやってくる外国人をチベットの人達はどのような捉えかたをしているのでしょうか。

ペマ　チベットで私があった若い人達の意見だけですべては語れないので断定的には言えませんが、然しまあ若い人達である程度世の中の特に国際的な動きに対して多少感じるとこのある人達は二つの考え方を持ってると思うんですね。一つはそう言う方々が来ることに依ってチベットを外国に紹介されて知るようになる。またそれらの人達から聞いたり勉強したりすることができると言うこととともう一つは登山隊の人達が中国の窓口を通してチベットに来ることに依って中国は過去二千何年にできなかった「チベットは中国のものだ。」と言う事実を作ってしまうんではないかと当然のこと乍らそれに対し懸念している。チョモランマなど山一つ一つの山名はチベット語なのにそれがいつのまにか漢字で書き表わされるようになりそれが歴史的事実として中国のヒマラヤとなることは我々チベット人としては有難度くないことです。

これから出かける登山隊に対してチベット人としての要望がありましたら……

ペマ　登山者の中にはただ単に山に登る人もいるでしょうしまた、山に登る人の中には山に住む人達に対して愛着を持っている人達もいるでしょうし然し、そうじゃなくて自分の名声の為に山に登りたいからそこに住む人達の意志は踏みにじってもいいと言った人もいると思います。私達としては出来るだけそこに住む人達についても愛着を持って出かけられれば有難いと思います。それから、昔のチベットは悪かったが今は良くなっているとおっしゃる方がいますが、そう言う方々に私からチベット人として強いてお願いしたいことは果して昔のチベットをご存知だったかどうかと言うことなんですね。私も日本に１５年以上住んでいますが今だに自信を持って日本について若し書

けと言われたら何一つ書けません。自分の見た事、体験した事これは写実的に書けます。然し、日本は良いものだ悪いものだあるいは断定的に日本の政治がこうだ経済はこうだと総合的に言えるかと言ったら僕は１５年以上日本にいますが未だにいえません。

確かにそうですね。乏しい経験でもって全てを語ると言うのは、我々ヒマラヤの報告書などをみてもこう言ったものを断定的に活字にしていいものかどうかと言うのを多々目にすることがありますからね。

ペマ　僕は体験した事を写実的に書くのは良いと思んです。チベットについて悪く書かれている方々がおりますがこれは意図的に悪く書いてるのではなくて、その人にとっては多分真実であろうし事実だと思うんです。然しそれを自分が誰々から聞いたとかこうであると言うことじゃなくて、自分が知っているような事を書くと読む人はそれによって考えちゃうでしょ。

そうですね。活字にするとウソもホントになる恐しさがありますからね。

●小ラッサ、ダラム・サーラ

現在のダラム・サーラについてご紹介してもらえればと思うのですが。

ペマ　今ダラム・サーラに亡命政府があるわけなんですが私達、チベット人の場合にはこれはダライ・ラマ法王猊下自身のお考えでもありまして亡命政府を認めてもらうような働きかけは外国に対して全然してないんです。それは何故かと言うと法王猊下の考えでは世の中には自分の国民から認められなくて外国から認められてる政府が沢山あるけれども少なくとも自分は自分の国民から認められた政府であればそれでいいと、で～他の国とか他の国家に認められてそれを国民に押しつけられてもしょうがないと、だから大事な事は国民がどう考えるかと言うことであって、そっちの方を重視すべきだと言うことで亡命政府として特別に正式に認めてもらったことは全然ありません。只、勿論仕事する上でね暗黙な理解を示してくれる国がいろいろありますがね。

それでダルム・サーラの主な仕事と言うのは、１９５９年の４月から今日に致って一番力を入れてるのは教育です。難民の教育、それから難民の福祉。今、難民学校がたしか４０いくつあります。それから高等学校以上の教育を受けているのはもう５,０００名位いるんじゃないですか、難民１５万人と言われる中の５,０００名です。

今、１５万人なんですか。一時は２５万人とも言われておりましたが。

ペマ　それはね、こうなんです。チベット系の人達は１９５９年以前から来ているチベット人をいれたら５２０数万人位いるんです。ところがインド政府をはじめとして国連の難民高等弁務官それから国際赤十字社ですね。この辺から難民として認めていると言うか援助を受けてる人達が１５万人前後と言うのです。

それからチベット難民が他の難民と違うところは勿論あの難民である以上、難民と言うキャラクターに入るわけですけどチベット難民の場合、職業的難民になりたくない、即ちいつまでも人の慈悲で生活はしたくない少しでも自立して少しでもそう言うその助けて下さる方の負担をかるくしてやる。そう言う意味で今、難民センターはネパールでもダージリンでも各地に難民センターを作ってこうしたカーペットを作ったりチベットの伝統的な手工業を守るためにそう言うセンターを沢山作っているんです。その理由と言うのは、一つは少しでも自立して経済的に楽になるようにと言うことと、もう一つはチベットの命と言うか民族の命と言うのは文化しかないわけですから、その文化を維持しようと言うことでまあ～そう言う活動をしているわけです。

ダラム・サーラの街には小ラッサと言う名前をつけてられるそうですが。

ペマ　はい、そうです。それからもう一つチベット難民の亡命政府の特徴と言ったら、これはもう皆さんはネパールとかあちらの方へ行かれてるので判ってると思んですが、１９７何年でしたかあのムスタンで……。

１９７４年ですねあのカンパトラブルは。

ペマ　あの時もゲリラに対して法王猊下からテーブの中にですね、私達はその人達の気持は良く

判る。結局、自分の自由と言うのは最悪の場合には力で守らざるを得ない時もあるけれど他の民族、他の土地で血を流すと言うことは自分達にどんな正当な理由があるにせよやるべきでないと、それがまあ一つには世界中をみたらチベット難民、チベットのいろんな運動と言うものは中途半端な面があると思うのです。只、それは国民が平和的なみかたを指導者から頂いている以上はその指導者の考え方に従っていかなくちゃならないから、だからあの１９６０年当初、チベットとパレスチナの場合ではむしろチベットの方がね当初は難民としても良く知られてたと思うんですね。だけどそれはダラム・サーラの法王猊下の一つの考えかたとしては出来るだけ他の民族には迷惑をかけないという方針でこれまでやっているのです。

あのネパールのカンパ・トラブルは’７４年に初めて訪ネした年に起ったものですから興味深いものがあります。

ペマ　ほんとはね、カンパ・ゲリラとかと言うのは、またちょっとこれがね外国の宣伝のしかたがありましてね、概念が間違ってますよ。ほんとは「チベット自由の為の戦士達」とでも言うべきでしょう。でこのカンパと言ったのは何故かと言うと’５０年代からチベットの東の方でまず中国と衝突するわけですね。その時、民衆が特にカムの人達が中心になってゲリラ活動をやったものですから、あとでチベット全土からきてやるわけですよ。だから数からいけばカンパ・ゲリラとなってますけど３０％位じゃないですか、あとは他の地方から来ているのです。

そうですか。’５３年あたりの中国の侵攻に対して一番最初に峰起したのがカンパだったんですね。

ペマ　そう、結局地理的に一番近いですからね。

最後にダライ・ラマ14世法王猊下の近況などお聞かせ願えればと思うんですが。

ペマ　法王猊下は毎日４時３０分位に起床して午前中はほとんど宗教活動、午后は各省の各大臣からの報告を受けたり表敬訪門の対応に追われており、夜９時には就寝と言ったところが法王猊下の日課です。今、最近は出来るだけ一つは各地のチベット難民キャンプを廻って励ますと言うことと、それからシッキム、ブータン、ラダーク等のヒマラヤ地域に於ける多くの民衆にとっては宗教的、精神的なものでは法王猊下なんです。これはチベット人に限らずですが、これらの人達への励ましも合わせて行っております。

どうも本日は長い間お忙しいところありがとうございました。

ペマ　いえ、どういたしまして。余り山に関係するお話しでなくて申し訳けありませんでしたね。

（インタビュー・構成　尾形）

会費の早期納入のお願い

ＨＡＪの事業は現在飛躍的に増大しており、名実ともに我国におけるヒマラヤ・センターをめざして懸命の努力がなされています。

常勤職員の設置、ルームの維持、機関誌「ヒマラヤ」の発行、各地での日本ヒマラヤ会議開催、ヒマラヤ登山学校隊の派遣や登山隊の派遣、国際交流による研究会開催、ヒマラヤ情報の適確で迅速な提供等々、最大限の会員サービスが展開されています。

これらの各種事業を実施するためには多額の経費を必要としますが、とうてい会費収入だけでは不可能であり、様々な手当をしながら維持しております。

しかしながら、更に会員サービスの抜本的向上をなすためには、会財政の基本となる会費収入の確立が最も重要であることは論を待ちません。

すばらしいＨＡＪを建設するために会費の早期納入について会員各位の御理解をお願いする次第です。

◉ナンダ・カートカンパのお願い

ナンダ・カート事故につきましては現在約150名の会員の皆様からカンパ協力をいただきました。ありがとうございました。しかし、借入金を充当して処理費に充てているのが現状です。皆様のご協力を重ねてお願い致します。

地域ニュース

《パキスタン》

北部地域での観光・登山規則の全面改定について

パキスタン政府観光省は、1月25日に北部地域での観光・登山規則などを全面的に改訂した。これは観光や登山に便宜を計り一層の観光促進をねらったものである。

○カラコルム・ハイウェーの開放

これまでイスラマバードの観光省で3日がかりで通行許可を得て、フンザのカリーマーバードまでの立入りが許されていたのが、今後は何の許可も必要としないで、カラコルム山脈の北側、バートゥーラ氷河とカラコルム・ハイウェーの交差するバートゥーラ橋まで入れることになった。そこから中国国境のクンジェラーブ峠まで約100Kmである。

○トレッキングの全面改定

従来トレッキングは、高度5,000mを上限として許可されていたが、今度は6,000mまで許可する。特にラワルピンディー・アボッターバード・マンセヘラ・コーヒスターン・ディール・スワート・ディアーミールの各地区におけるトレッキングにはいかなる規制もなく自由である。

ただし、チトラール・ギルギット・スカルド地区のトレッキングには許可を必要とするが、これはイスラマバードの観光省、またはPTDCあるいはそれぞれのDC（デュプュティ・コミッショナー）の事務所で申請後24時間以内に許可証が交付される。

○登山許可発行を早める

開放地域に於ける登山許可は、従来90日を要していたが、今後は24時間以内に交付されることになった。なおチトラール・ギルギット・スカルドの各地区の非開放地域の登山許可は、従来の90日から14日（2週間）以内に交付されることになった。

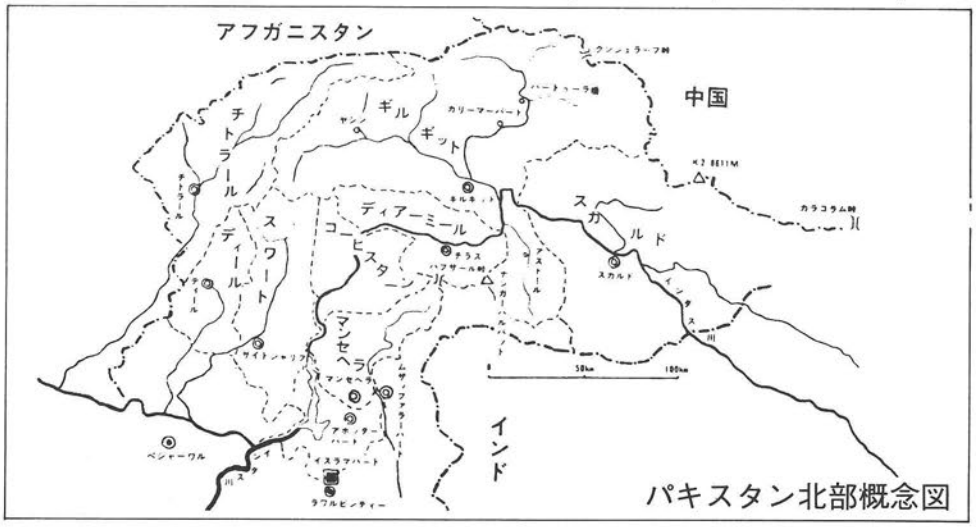
ここで言う開放地域と非開放地域と言う意味が明確でないため、はっきり言及できないが、チトラール・ギルギット・スカルドの3地区を単純に非開放地域、それ以外を開放地域と考えるのが順当のようである。

これについては、さっそくパキスタン政府観光省に照会してみたい。

○登山料の改訂

登山料が次のように改訂された。登山料は従来のように申請とともに払い込むのか、変更があったかは不明である。

6,000m ～ 7,000m　　7,000R・S



7,001m ～ 7,500m	12,000R・S
7,501m ～ 8,000m	15,000R・S
8,001m以上（K_2を除く）	20,000R・S
K_2	30,000R・S

（日・パ協会・パーキスターン3月号より）

トピックス

ヌン・1978の集会報告

ＨＡＪ第１回の登山学校として1978年にヌンに登ったメンバーは毎年１回の集まりを開くことにしている。今回は、松本市在住の飯村富彦の担当で下記のように開催した。

３月６日～７日、鹿島槍国際スキー場・立教鹿島槍山荘に宿泊、思い出話とスキーを行った。毎年のようにNepal へ行っている安藤、昨年、長野山協隊で見事ガッシャブルムＩ峰に登頂した東、学士入学して歯医者を目指しながら山にも登る飯村、スキー指導員も間近の小川、このところ本職で忙しく外国へ行ったり来たりしている沖が集まった。夜は、昨年ナンダカートで帰らぬ人となった故・寺本政幸君の追悼の座談会、翌朝は、ガッシャブルムのスライド、日中はスキーとフルに楽しんだ。丁度、東京理科大ＯＢでチョモルンマ隊隊員の小原氏も合流されて、さらに想い出深い集まりとなった。

なお、残りの隊員は、鈴木は仕事で韓国、八嶋は北海道、高橋は仕事で欠席した。今後も原則として毎年３月の第１日曜にどこかで集まることに決めた。ヌン・１９７８の隊員以外でこの集りに出席したい方は、２月中旬頃に沖まで問合せて下さい。

また、ヌン・クン周辺の地図を名城大山岳部、広島山岳会の名越氏などの協力で試作しました。ＨＡＪ事務所に１部送ります。ご希望の方は、実費５００円（送料共）で送ります。　（Ｏ）

1982年クン登山学校隊 八ヶ岳合宿報告

1981年ナンダ・カート登山学校隊の事故により実施か否か保留になっていた1982年クン登山学校隊は、昨年１１月正式に実施が決定し、協会派遣インストラクター４名、応募隊員１２名でチーム作りが始動した。

既に第一回合宿を本年１月９日～１０日ＨＡＪルームで行い、第二回合宿を２月２７日～２８日ＨＡＪルーム並びに岸体育館で実施した。この間、登山学校隊の性格、各担当の分担、基本戦術、高所順応の学習を行って来た。又、合宿とは別に関東近効の隊員（９名）を中心に毎月第一、第三木曜日にＨＡＪルームに於て集会を持って来た。

第三回合宿は、山行を通しての相互理解と登山技術の基本的な確認を目的に八ヶ岳西面で実施された。全国に隊員がまたがっている性格上、ミーティングの場を常に設定しなければならない宿命を持っている登山学校隊であるが、今回も、ミーティングの場を効率的に行うために、赤岳鉱泉小屋を宿泊地として設定した。

３月２０日（曇り）

午前11時茅野駅に集合した10人はタクシー等で美濃戸口へ。ここで長野の勝山が合流。更に一ピッチ先の赤岳山荘で千葉の川名が追いついた。天候は曇りながら風のない中を良く踏み締められた雪道の北沢を登って赤岳鉱泉には15時過ぎに到着した。早速自炊に入り、18時から装備関係のミーティングを行った。消燈時間の20時になっても消えないため、約一時間登山談義に花を咲かせた。

３月２１日（雪後曇り）

昨夜遅く横浜の小坂が到着。朝早く山形の今野、遅れて静岡の工藤が到着し、今回の予定者15名が揃った。雪で気温も高い。８時過ぎ大同心ルンゼへ向かった。今日は、氷壁技術の確認のため二段の滝を場所として選んだ。大同心ルンゼ内は小さな表層雪崩の跡が一つ出ていた。二段滝の下右岸側の岩壁基部にテラスを作り全員が集合する。これよりトップロープによるダブルアックスの技術を稲垣副隊長の指導で行う。間断なく降る湿雪とチリ雪崩の中で、初めて練習するメンバーを仲間達が助けながら約４時間行って打上げた。

13時30分、鉱泉小屋に到着すると、雪崩で多勢いが遭難したとの情報である。休む間もなく、行

者小屋方面から遺体が到着した。女性隊員を除いて全員で、遺体の収容や生存者立会いでの身元確認、協力者リストの作成等を行った。更に降雪中ではあったが、遺体の見張りを交代で隊員が行っている内に救助隊が到着した。

我々、山仲間としての役割りは一応果したものと判断し、ミーティング再開のために炊事の準備に入った16時30分に救助隊班長からの協力要請があった。遺体を降ろすのに人手が足りないとのことである。我々は全国から構成されているため、一同に会してミーティングを行う時間が少いためこの合宿のこの時間は非常に貴重であり、少くとも、この遭難では、一応の協力は果したつもりであったが、余りに少い救助隊の人員を考えると、協力をせざるを得ず、隊員には申し訳なかったが急拠出動することを決定した。

下山準備を終えて隊を四隊に分け、三隊が遺体を預り山森と女性隊員は別動隊として、下山を開始したのは17時過ぎであった。

下山を始める頃には、あれほど激しかった雪も止み、明日の好天をうかがわせるような天候となっていた。

第二えん堤上で遺体を引き渡し合掌し、19時過ぎに全員が赤岳山荘に入った。

3月21日（快晴）

予想通りの快晴であった。赤岳山荘の窓からは青空に阿弥陀岳の雄姿が望まれ、昨日の大事故が嘘のように静かにのどかな山が広がっていた。

9時から12時まで山荘で食糧、記録、高所順応のミーティングを行い散会した。

× × × × × × × × ×

1982年クン登山学校隊合宿参加者

〔隊長〕山森欣一（東京）〔副隊長〕稲垣公平(埼玉)〔インストラクター〕今野一也（山形）〔隊員〕長繁夫（栃木）丸谷政明（東京）三好喜代美（群馬）勝山教孝（長野）小暮孝（栃木）平田清志(東京）小坂邦弘（神奈川）工藤誠志（静岡）川名正一（千葉）三浦敏弘（愛知）太田行雄（神奈川）高坂裕紀（山形）尚、インストラクターの角田不二（埼玉）は都合により合宿は不参加であった。

本登山学校隊は土居正勝氏が隊長の予定であったが勤務先の都合で2月下旬山森欣一が就任した。

（山森・記）

理事会報告

昭和56年度第二回理事会が開催される

日　時　昭和57年3月19日（金）17時30分～21時

場　所　HAJ事務所

出席者　稲田定重、角田不二、堀内立三、清水澄、小林英見、内田嘉弘、山森欣一（以上本人出席）、柴田金之助、山倉洋一、岩水龍峰（以上委任状提出）

議　事　1.昭和56年度収支決算について

年度末につき現在整理中のため後日報告予定。

2.昭和56年度事業報告について

56年7月、56年12月にそれぞれ事業報告を行っているため、その後についてインドヒマラヤ会議、日本ヒマラヤ会議等について報告し了承された。

3.昭和57年度事業計画について

事務局からの（案）について稲田専務理事から逐一説明があり、これについて討議を行った。特に事務局体制、ヒマラヤ研究所の呼称、登山学校実行委員会の構成について質疑が行なわれた。

4.昭和57年度収支予算について

事業計画の検討と関連して討議された。

5.その他

以下の件が承認された。

イ)入会希望者の承認の件

昭和56年度入会者84名全員承認。

ロ)除名対象者の承認

昭和53年度以降会費未納で二度にわたる督促にも納入しなかった者77名全員承認。

6.役員補充の件

現在欠員の理事については総会に於て補充することを承認。

福岡ヒマラヤ会議報告

初夏を感じさせるような、さわやかな風が吹く3月14日(日)福岡に於て第16回目を迎えた日本ヒマラヤ会議が開かれた。当日は、長崎・佐賀・福岡の岳人28名が参加した。

午前10時、地元福岡の世話人である倉智清司氏の開会の挨拶の後、1981年カンチェンジュンガ縦走登山隊の報告が山森欣一隊長から行われた。特に縦走の発想と出発の最後の段階まで当初の計画である「縦走」に固執し続けた姿勢が話された。8ミリの上映では、暗幕が不備で見にくかった。

午後1時からの「8,000m峰の諸問題」では来年福岡から8,000m峰を目標とした登山隊が2隊計画されている折から、K_2 やカンチェンジュンガの経験者と計画者により問題点について具体的な検討がされた。山森欣一氏からは特に「目標設定」が明確に行われていることが大事ではないか？又、この目標設定があいまいであると、その後の戦略の問題でも、隊の実力不足にも拘わらず、時流の先端だけを模倣することになり事故につながるケースが多いのではないか？との指摘が行われた。又、参考として下表が提供され解析が行われた。

午後3時からは、東京医科大学附属病院の武井滋氏からエベレスト街道ベリチェの研究所の体験を中心に高所障害の実例が紹介され、予防、処置について質疑が行なわれ5時過ぎ散会した。

日本隊による8,000m峰登山の概要（1970年～1980年）

作成：山森欣一

年度	山名	高度	登山高度	登頂日	登山日数(登頂まで)	登山速度	最終キャンプ頂上の高度差	最終キャンプから所要時間	最終キャンプからの速度
1970	マカルー	8,481m	3,781m	5/23	63日	60m/日	531m	20H40	26m/H
1970	ダウラギリ I	8,167m	3,667m	10/20	45日	81m/日	367m	4H45	77m/H
1971	マナスル	8,156m	4,656m	5/17	63日	74m/日	796m	7H05	112m/H
1973	ヤルンカン	8,518m?	3,308m	5/14	47日	70m/日	568m	11H40	49m/H
1974	マナスル	8,156m	3,806m	5/4	29日	131m/日	506m	9H	56m/H
1975	エベレスト	8,848m	3,498m	5/16	61日	57m/日	348m	7H	50m/H
1976	マナスル	8,156m	4,306m	10/12	37日	116m/日	506m	7H	72m/H
1977	K2	8,611m	3,611m	8/8	53日	68m/日	511m	13H50	37m/H
1977	ブロードピーク	8,047m	3,147m	8/8	33日	95m/日	547m	6H45	81m/H
1978	ダウラギリ I. p	8,167m	4,517m	5/10	52日	87m/日	667m	5H45	116m/H
1978	ダウラギリ I. po	8,167m	3,967m	10/19	63日	63m/日	367m	5H35	66m/H
1979	アンナプルナ I	8,091m	3,891m	5/8	42日	93m/日	591m	5H05	116m/H
1980	カンチエンジュンガ	8,598m	3,548m	5/14	56日	63m/日	698m	11H15	62m/H
1980	ガッシャーブルム II	8,035m	2,985m	8/2	47日	64m/日	685m	10H	69m/H
1980	チョモランマNE	8,848m	2.348m	5/3	43日	55m/日	598m	12H55	48m/H
1980	チョモランマN	8,848m	2,698m	5/10	48日	56m/日	618m	14H30	43m/H
1981	K2	8,611m	3.261m	8/7	49日	67m/日	111m	5H30	20m/H
1981	カンチエンジュンガ	8,598m	3,098m	5/9	54日	57m/日	298m	7H50	38m/H
1981	ヤルン・カン	8,518m?	3,018m	5/9	54日	56m/日	268m	7H15	37m/H
1981	ダウラギリ I	8,167m	3,167m	6/2	6日	528m/日	567m	12H30	45m/H
1981	マナスル	8,156m	3,556m	10/12	11日	323m/日	1,006m	8H40	116m/H
1981	アンナプルナ I	8,091m	4,011m	10/29	62日	64m/日	598m	8H20	72m/H
1981	ガッシャーブルム I	8,068m	3,068m	8/3	51日	60m/日	1,168m	14H55	78m/H
1981	シシャパンマ	8,013m	2,913m	4/30	28日	104m/日	313m	6H	52m/H

インフォメーション

東京ヒマラヤ集会のお知らせ

3月のヒマラヤ集会は講師の都合により急きょ昨秋ランタン・リの初登頂に成功された中岡久氏にお願いして開きました。当日は、スライドを混じえながらランタン・リの報告をして戴き山座同定に議論百出するなど楽しい一夜でした。

4月の東京集会は下記の通りですので会員の皆さん！ご友人などお誘いの上是非お出かけ下さい。

記

日時　4月26日(月)　p.m 7時～9時
於　HAJルーム
講師　（接渉中）

ブータン王国展開催！

昨年の神戸ポートピアで好評を博した「ブータン王国展」（主催・ブータン王国商工省、観光省、神戸国際交流協会）が今また神戸貿易促進センターで開催されている。

ブータンと日本の橋渡しと云えばコロンボ計画の農業指導専門家として長くブータンへ赴いておられる西岡京治氏の名が浮ぶわけですが今回の展示会も西岡夫人の里子さんがすべておぜん立てをしての開催である。

展示品はポートピアの時に送られてきたもののほか、織物や民芸品、生活用具……等、4月11日迄開催。

ヒマラヤ登山実践研究会(仮称)発足のお知らせ！

日本ヒマラヤ協会は、1967年創立以来ヒマラヤ諸国との友好・親善・相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開して来たことは会員の皆様周知のとおりであります。

特に登山の分野におきましては、1971年以来毎年のようにヒマラヤ諸国に登山隊を派遣し成果を上げて参りました。これらの登山の実績は多くのHAJメンバーの経験の積み重ねなくしては達成できなかったことは勿論ですが、わけても1972年HAJ内に発足した「EXPEDITION 研究会（以下EXP研と略）」の果した役割を見逃す訳には参りません。

EXP研は10年間に5つの遠征を実施し、1981年のカンチェンジュンガ縦走に総力戦で臨み、これを完遂し一連の成果を残しました。

1974年　ラムジュンヒマール（6,983m）第二登
1975年　ヌン（7,135m）北稜約6,700mまで
〃　リシパハール（6,992m）初登頂他
1978年　バツーラII（7,730m）初登頂
1981年　カンチェンジュンガ縦走

しかしながら1980年代に入り登山界は「自然への回帰」を基調とした新しい流れが台頭し、精神的にも肉体的にも高いレベルの登山が脚光を浴びつつあり定着して行くものと思われます。

これらの中にあってヒマラヤ登山だけが孤高を保っていることはあり得ず、やがて我国のヒマラヤ登山の多くも又、これらの流れを反映して実践されることでしょう。

しかし、我国のヒマラヤ登山には様々な障害があり、ヒマラヤを夢見つつも実現できないメンバーや、トレッキングに終ってしまうメンバーが多くいることも現実であります。そこで広域であることのハンデキャップをあえて承知の上でHAJ内に新しく「ヒマラヤ登山実践研究会（仮称）」を旗上げすることにしました。

広域のハンデを乗り越えて**HAJを母体に様々なヒマラヤ登山を実践**していく強い意志を有するメンバーの参加を広く募ります。会員はHAJメンバーに限りますが、ヒマラヤ登山の経験の有無は問いません。会を主体とした第一回登山を1983年春にネパールヒマラヤ8,000m峰に於て行うべく準備を進めております。

会員申込みは早急にHAJ内「ヒマラヤ登山実践研究会」まで。

（発起人代表　山森欣一）

特集

禁断の地の山・ブリクティ計画

ヒマラヤの王国、ネパールの北西辺境にあってチベットと接するムスタン王国は1.000年の歴史を経って今なおすべての外国人に堅く門を閉ざす禁断の地であり文字どおりの秘境である。

このムスタン（ロー）を見降すかのようにダモダールとペリ・ヒマールの分水嶺上にひっそりと鎮座するブリクティ・サイルー聖者の山と云う。

昨春、ネパール政府観光省よりこの幻の山、ブリクティ峰が解禁されるや否やHAJでは早速、この処女峰の初登頂を狙うべくアクションを起し、昨秋、許可取得するまでにこぎつけた。然し、許可されたアプローチ・ルートが通行不能と云わしめる南面のナウル・コーラからのルートであった為、実施時期を延期して資料の収集を計りルートの研究を重ねてきた。此の度、隊長自らの現地偵察の結果を得て実施の運びとなった。以下に計画のあらましを紹介する。

—目標の山と遠征の目的—

1. 目標の地域と山

ネパール・ヒマラヤ中部、ダモダール・ヒマラヤのブリクティ峰（Mt.Bhrikuti 6,720m）

2. 遠征の期間

1982年4月17日～6月16日

3. 遠征の目的

1) ブリクティ峰の初登頂

2) 地域の文化・民俗の調査

—登山隊の名称・構成—

1. 隊の名称

1982年ネパール・日本ヒマラヤ協会合同ブリクティ登山隊

NEPAL—HAJ JOINT EXPEDITION TO Mt.BHRIKUTI 1982.

2. 構　成

隊長　菊地　薫（35）

隊員	日本隊員	10名
	ネパール隊員	3名
	キッチン・ボーイ	2名
	メール・ランナー	2名
	リエゾン・オフィサー	1名
	サーダー	1名

3. 推進の組織

1) 遠征本部

〒160　東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

日本ヒマラヤ協会

※留守責任者　山森欣一

2) 現地事務所

c/o EXPRESS TREKKING(P)Ltd.
P.O.BOX339　Naxal Bhagabati B
Bahal, Kathmandu, NEPAL.
TEL:13017

—日程概要—

2月26日　現地渉外要員として菊地隊長成田発。

4月 7日　先発隊成田発（隊荷通関、渉外）

4月17日　本隊成田発

4月18日　本隊カトマンズ着、全隊員合流

4月22日　ポカラ着（by bus）

4月24日　往路キャラバン開始

5月 8日　ベースキャンプ建設（Teha Chang Khola内）

5月 9日～28日 登山活動期間（20日間）

5月29日　ベースキャンプ撤収、帰路キャラバン開始

6月11日　カトマンズ帰着（挨拶、隊荷整理）

6月15日　カトマンズ発（空路）
6月16日　帰国

―目標の山の概念―

ネパールのほぼ中央部に東はマルシャンディ、西はカリ・ガンダキの両大河に挟まれた格好で北西から南東方向に全長約80㎞にも及ぶ一大山群をなしてアンナプルナ・ヒマールは横たわる。

このアンナプルナ・ヒマール上にあるティリッチョ・ピーク(7,134m)からさらに北東へ高度を下げながらトロング(6,535m)へと延びる山脈はムクチナート・ヒマールと呼ばれ、さらにその先北東へと連らなる山脈がダモダール・ヒマールである。ダモダール(Damodar)とはDam＝太った、Odar＝腹、の神と云う意味があるらしくヒンズー教の神で腹の太ったと云うとガネッシュ神のことの様に思えるが一方ではクリシュナ神とする説も多い。このダモダール・ヒマールの盟主として君臨するのがブリクティ・サイル(Bhrikuti sail 6,720m)である。ブリクティ(Bhrikuti)は、女性の名前でネパール古代・リッチャビ時代の最初の王様Ansu Darmaの娘であったと言われる。紀元7世紀頃、チベットの有力な王Namri Srang Btsoとの政略結婚でヒマラヤを越えて嫁いだ。

このダモダール・ヒマラヤに於ける登山記録は少なく1955年のドイツ隊の記録ぐらいであろうか。この隊の行動は「アンナプルナの四人男」（ドイツ・ネパール遠征隊1955年）に書き印されてるように、たった4人で春に訪ネするや、まず5月30日に主たる目標のアンナプルナⅣ峰の初登頂を果した後、次いでナウル・ガオンにBCを置いて6月10日、ピサン・ピーク(6,091m)、6月22日、無名峰(5,600m)、6月23日、ナウルホルン(5,450m)、7月2日、カン・グルー(7,010m)7月14日、無名峰(6,150m)、7月23日、東チュルー(6,200m)と6つのピークをことごとく陥落させた。然し、彼等はそれでもとどまらずさらに今度はマナンボートからトルム・レーク・パスを越えてムスタンボートに出、そこで更に新しい登山活動を始めた。

まず、ムスタン・ラの下にBCを設け8月25日にダム・カン西峰(6,100m)に登り8月29日にはユロー・カン(6,400m)に登る。更に8月31日にはカン・ジュリ(5,800m)に登るなどこのダモダール・ヒマールの3つの処女峰に足跡を印したのである。

これら3つのピークよりも更に奥に鎮座するブリクティは、東はチベット、西はムスタン(ロー)南は悪絶なナウル・コーラと云った政治的、地理的要因があって今日迄容易に近づくことさえ出来ぬまま不遇をかこっていた。

今回のアプローチ・ルートとしては、ムスタン

ダモダール・ヒマラヤ概念図

経由のテハ・チャン・コーラからのルートを切望している。

カリ・ガンダキのチャランの部落を後にテハ・チャン・コーラを遡りこのコーラの源頭附近(4,200m)にBCを建設し、さらにルートはブリクティ峰より北方に延びる稜線上に取り、C1(4,900m)、C2(5,600m)、C3(6,100m)と順次上部キャンプを展開してアタックに臨む予定である。

然し、我々の切望しているこのアプローチ・ルートがネパール政府より許可が得られなければ、必然的に我々は南面のナウル・コーラ側を取らざるを得なくなる。このナウル・コーラは、ネパール・ヒマラヤの権威であるハルカ・グルン博士をもって通行不可能と云わしめた谷で途中に門柱石の様に立ちはだかる大ゴルジュ帯があり容易にその山懐深く近づけてはくれないのである。

こうしてみると今回の遠征はブリクティ峰そのものもさることながら山へのアプローチも大変興味のある遠征と云える。

—隊の構成—

1) 生年月日
2) 住　　所
3) 職　　業
4) 海外登山歴

隊　長

菊　地　　薫(35)

KAORU KIKUCHI

4) 1974年秋　ラムジュン・ヒマール(6,983m)(登頂者)
1980年春　カンチェンジュンガ偵察隊(8,598m)(副隊長)
1981年春　カンチェンジュンガ(8,598m)(副隊長)
1981年秋　ナンダ・カート捜索隊(6,611m)(隊長)

隊　員

佐久間　　隆(31)

TAKASHI SAKUMA

4) 1976年春　アラスカ、ハンチントン(3,932m)
1981年春　カンチェンジュンガ(8,598m)
1981年秋　ナンダ・カート捜索隊(6,611m)

隊　員

土　谷　正　伸(31)

MASANOBU TSUCHIYA

4) 1980年冬　テント・ピーク(5,663m)
1981年冬　アイルランド・ピーク(6,189m)
1981年春　ダンブッシュ・ピーク(6,012m)

隊　員

三　笠　喜美夫(30)

KIMIO MIKASA

4) 1978年　インド、ヒマチャル・プラディッシュ無名峰

隊　員

浅　見　昭　夫(24)

AKIO ASAMI

隊　員
遠　藤　喜重郎(35)
KIJURO ENDO

4)　1980年秋　インド、ケダルナート・ドーム(6,813m)

隊　員
高　橋　　照(68)
AKIRA TAKAHASHI

4)　1962年春　ビッグ・ホワイト・ピーク(7,083m)(隊長)
　　1971年春　マナスル(8,156m)(隊長)
　　1975年春　ダウラギリ(8,167m)

隊　員
寺　田　捨　己(42)
SUTEMI TERADA

4)　1973年秋エベレスト(8,848m)

隊　員
新　妻　　勲(26)
ISAO NIITSUMA

隊　員
中　里　雅　行(26)
MASAYUKI NAKAZATO

隊　員
金　子　英　一(38)
EICHI KANEKO

ダモダール・ヒマール（左）を望む（1965年 愛知岳連隊提供）

ヒスパー山群 その3

杉本　忠男

（神大高校提供）

ヤズギル・ドーム北峰C.7400m

この山も主稜線からやや北にはずれた所にある為、近年までほとんど知られていない存在だった。南北二つのピークのうち南峰の方がやや高いが、こちらは北峰とディスタギル・サールにはさまれてあまり見ばえがしない。しかも一昨年ポーランド隊にあっさり登られてしまった。南峰に比べると北峰は未登峰、それに東面はヤズギル氷河まで高度差約2,500mも切れ落ちてみごたえがある。

北峰へのルートとしてまず考えられるのはクンヤン氷河にベースを置き、ポーランド隊のルートをたどった後、南峰から北峰を往復する方法だ。ルートは長いが登攀技術の問題はほとんどない。しかし7,400mもの高所における縦走はよほど高所順応に気を配らなければ難しいだろう。それどころかうかつに突っ込めば南峰を登り返せず撤退不能におちいる危険すらある。それよりもシムシャル側がオープンされるのを待ってヤズギル氷河から雪の東稜を登る方が無難なルートだ。たいした悪場もなく、雪崩の危険も少なそうだ。この山の両面上部にはゆるやかな雪面（雪原？）があるので、マラングッティ氷河の状態さえよければこちらからもやさしいルートが採れるだろう。

ヤズギル・ドーム北峰のさらに北6Kmほどのところにある仮称シムシャル・サール（C.6,400m）は、北アルプスでいえば鍬崎山のような存在でマイナー・ピークとはいえその美しい雪の峰は少々気になる存在だ。

ディスタギル・サール7,885m

ヒスパー山群の最高峰である。この山は東西に細長い頂稜を持っ為南面から眺めるとただばかでかいだけで、その汀洋とした姿はまが抜けた感じさえする。しかし東または西から望むと見間違えるほどすっきりした三角錘でなかなか魅惑的だ。中央峰は未登だがこれだけをわざわざ登りに行くほどのピークでもない。主峰や東峰が登られた現在、南面に興味あるルートはない。せいぜい東峰から中央峰を経て主峰までの縦走くらいか。この山も北面の解禁を待ちたい山の一つだ。マラングッティ氷河から中央峰へ手頃な雪稜がのびている。この雪稜から未登の中央峰を経由して主峰を狙うルートがいい。また北西稜は急峻な岩稜で手ごたえのある面白い登攀ができるだろう。モムヒル氷

河から南西稜のコルへ上るやさしそうな雪の斜面があるが、この斜面はクンヤン氷河側の斜面同様雪崩の出そうな気の進まぬルートだ。

マラングッティ・サールC.7,200m

ディスタギル・サール北西稜が一担標高6,200m附近まで急激に落ち込んだあと、再び高度を上げて形造られているのがこの山だ。バッーラ山群からはどっしりした山容が望まれ独立峰としてよいだろう。この山はシムシャルがオープンされるまで手のつけようがない場所に位置している。従って過去に何隊か登山申請をしているがいずれも許可はされていない。

東面や西面下部の資料がないので言明はできぬが上部のみについては西面、東南稜、北西稜とも十分登攀可能に見える。またこの山容からすればマテングッティ氷河側にも比較的容易な登攀ルートがありそうだ。

ブラルン・サールC.7,200m

この山はディスタギル・サールとトリヴォールの両巨峰にはさまれているので独立峰とはいいがたい。だが標高7,000mを越えたピークなので今後もこの山を見指すパーティが現れるだろう。南面から北東稜や南西稜のコルへ上るクーロアールは、どちらもハンギング・グレシャーをかかえ常に雪崩の危険におびやかされている。東南稜は急峻で岩場が多く技術的にはやや難しそうだが、このルートが一番確実であろう。１９８０年築後同人隊が東南稜を標高6,000m附近まで登っている。北面のモムヒル氷河側もいたるところにハンギング・グレシャーがかかっており、いいルートはなさそうだ。

トリヴォール 7,720m

東南面、北面、西面には岩壁を従え、北東稜、北西稜、南稜からなる３本の長大な雪稜にささえられており、どっしりとした風格をそなえた山だ。英国隊によって北西稜が登られているが他は総て未登のままだ。ガレサ氷河は、途中岩場やハンギング・グレシャーにはばまれて手頃なルートはないらしい。この山でまず注目されるのは南西稜であろう。中間部はやせた岩稜が続き、しかも途中標高7,000m以上の小ピークを越える困難なルートではあるが、十分やりがいのあるルートだ。クンヤン氷河側にはブラルン・サールや南稜上C.6,930m峰とのコルへ雪のクーロアールが上っている。これらは技術的にはやさしいが、雪崩の危険が多すぎてとても取付けない。こちらから考えられるルートも一本だけだ。まずC.6,930m峰の東南稜に取付き、6,930m峰の頂上直下を東側からからんでコルへ抜け、あとは南稜をたどるルートだ。下部に若干岩場があるが技術的にはやさしいだろう。だが南稜上部では雪崩を十分警戒する必要があろう。

トリヴォール南方６Km程のところにある無名峰6,629m峰も書き落とせない山の一つだ。クンヤン氷河側に落ちる各リッジの末端が大きな岩壁になっているので、クンヤン氷河へ入ったパーティの目を引いているようだ。南西や北東面も壁になっている。東稜末端の大岩壁は南側のルンゼから捲けそうだ。稜の中程も急峻だが、上部はゆるやかな雪稜となって頂上まで続いている。西稜は傾斜はゆるいが長くそしてやせた雪稜となって6,102m峰とのコルへ伸びている。

モムヒル・サール 7,343m

スカルドゥへの飛行機から望むと、真白な雪をまとい均整のとれた三角錘としてすぐに目を引くほどの秀峰だ。東南面のやや上部にはハンギング・グレシャーが横一列に続いている。オーストリア隊は東稜のコルからこのハンギング・グレシャーのすぐ上を斜上し、南稜上部に抜けて登頂した。この山でまず考えられるルートはオーストリア隊が中退した東稜だろう。途中にやせた岩稜があるものの技術的な問題はそれほどなさそうで、他より安全なルートとしてよいだろう。南稜は最上部がゆるやかな雪稜だが、中間部は雪崩の出そうな雪面、下部はやせた岩稜となっていてやや難しそうだ。北西稜はすっきりとした雪稜だが、上部に二ケ所ほどやせた岩稜がある。このルートは稜線上よりもガレサ氷河から稜へ上がるまでの方が問題で、よほどルートを選ばないと雪崩や落石の洗礼を受けるだろう。1980年にスペイン隊が取付

いた西稜（稜とは呼べないほど小さい）は中間部以上が雪を乗せただけのスラブ状の壁という感じで、雪崩の危険を考えたらとても取付けない。

モムヒル・サール南稜上にはC．6700m 峰とさらにその南に6,751mの二つに無名峰がある(標高はJ・ワラの資料に従ったが筆者はC．6,700m峰の方が高いと思う）。北峰はすっきりとした雪の鋭峰、南峰はややずんぐりした雪と岩の難峰だ。

ルプガル・サールC.7,200m

頂稜が東西に伸びた台形型の山というのが一般的な印象だろう。稜の両端と中程がやや高い為、西からそれぞれ西峰、中央峰、東峰とされている。西峰は三度、中央峰は一度登られているが、いずれの隊も西峰の南西稜にルートを採っている。地図を見ると、ガレサ氷河側からは中央峰の東南稜も考えられる。だがこのルートは稜自体にはたいした問題はなさそうだが、稜へ上がるまでが雪崩や落石の危険が多くうかつには取付けない。西峰の北西稜は途中標高6,700mほどの小ピークを持っているが、技術的にはやさしそうだ。フンザ側の谷は下部がゴルジュだそうだが突破する方法はないものか（誰がゴルジュであることを確認したのだろう。またもしゴルジュだとしてもそこを突破する方法をさぐったという話は聞かない。他人の既成観念や知識をうのみにするばかりでは面白い登山はできない。やはりこうした不明確な部分を自分達の力で解き明かしながら計画を押し進めてこそ、面白さも倍増するというものだろう）。北側のルプガル・ヤズ氷河には三つのピークのいずれもが面している。バツーラ方面から眺めるとこの氷河の源頭、標高6,000m附近は大きな雪原になっており、その下が大きく切れ落ちているようだ。未登の東峰は東からは勿論だが、バツーラ方面から眺めても一番しっかりしたピークに見える。1980m駒沢大隊が狙ったように西峰から東峰を往復するのも一法だろうが、ルートの長さや標高を考えると大部きついルートだ。やはりシムシャルのオープンを待って、モムヒル氷河に可能性を求めるのが一番無難であろう。

ディクト・サール 6,858m

ルプガル・サールの北4Km程の所にあるこのピラミダルなピークは、ルプガル・ヤズ氷河とモムヒル氷河にはさまれた位置にあるので、シムシャルがオープンされるまでは近ずけない山だ。ブマリ・チッシュからのパノラマ写真を見るとディクト・サールの頂上が顔をのぞかせている。東面上部は雪を付けているのに対して南面は大きな壁になっている。バツーラ方面から眺めると北稜、西稜、南稜とも頂上直下が急峻で、いずれも難しそうだ。

バツーラ方面から望むヒスパー山群西面

VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ③

東京朝霧山岳会カラコルム登山隊
ボイオハグール・ドゥアン・アシールⅠ峰
（ウルタルⅠ峰） 7,329m

植田宗男（隊長） 西原正（隊員） 山口秀男（隊員） 渥美直哉（隊員） 小林之美（隊員） 田村正己（隊員） 鈴木武樹（隊員）

・聞き手 角田 不二

バルティット古城の背後に、豪然と胸壁を屹立たせる名峰ウルタルに挑戦する隊がついに現われた。何故かこの山には今まで許可が降りないというジンクスがあった。そのため、これほどのいい山が今の今まで純潔無垢のままに保たれたのだ。

立ち向うのは、東京朝霧山岳会の植田隊長以下7人。さて、その素顔・・・・・・。

● 歴史は半世紀を超えたが……

――― 朝霧といえば名門山岳会ですよね。

植田 いえいえ、まったくだらしのない会ですよ（笑）。

――― でも、こんなものすごい事務所持ってるじゃないですか。それだけでも大変なもんだ。

植田 ええ、これだけは自慢できる。なんたって会の持家ですからね。その点はＨＡＪより立派でしょ。ＨＡＪは要するに借家住まいでしょ。

――― あれ、変なハナシになってきた（笑）。じゃあ、まあ家も持てるほどの古い歴史があるということで、会の歴史のハナシからぼちぼちしてもらいましょうか。創立はいつ項なんですか。

西原 昭和２～３年頃だと思います。アマチアキャンプ会という名称でスタートしたんです。ただ、この当時の詳しい事情はよくわかってない。創立者の名前もはっきりしないし。朝霧山岳会となったのは、昭和７年らしい。

――― じゃあ、もう半世紀を超えるんですね。

西原 この秋に創立５０年記念誌を出す予定です。

――― この前、都庁山岳部がそんなようなのを出してましたね。５０年を超える会って、日本全国でも数えるほどしかないと思いますが。

西原 ええ、歴史の古さではベスト１０位に入ると思いますよ。

植田 都岳連加盟が１３番目になる。もっともこれは古さとは無関係だけど。

――― 戦前の活動っていうと、どんなことをしてたんですか。

西原 秩父の山へ行ったり、越沢へ行ったり、今は登れなくなっちゃった武甲山の岩場の開拓もありますよ。昔はねえ、要するに下町のチンピラどもを集めて山につれてったんですよ。それで町にチンピラがいなくなったってんで、警察に償められたりしてね（笑）。

――― 昔の社会人山岳会ってみんなそんなような性格がありましたよね。

● 個々の動きからバインターへの結束

――― 昭和40年前後というのは、国内では初登攀が一段落して、ある種の転換期に入った時代だと思いますが、同時にそれが外貨の自由化ともあいまってクライマーの眼を海外に向けさせるようになった。

西原 そんな頃ですね。朝霧でも海老原がＲＣＣⅡに所属してヒンドゥークシュに出かけたりした。

――― ああ、ガゼン谷ですね。朝霧の人が海外に出たのは、あれが最初ですか。

西原 えーと、そうなりますか。あれが昭和42年で、43年にはやはりＲＣＣⅡでカフカズに行った会員がいます。それから46年になって無宗楽生会ってあのヘンな会ね（笑）、あれに入ってインドのヒマチャル・プラデッシュに行ったりしています。

――― 会員が個人的にいろいろな組織に所属して、あちこち出かける事が多かったんですね。

西原 うーん。なんていうかそういうムードだったんだなあ。それで私もいろいろな所に顔を出してゴチャゴチャといろんなことをやったんだけど、どこもなかなかまとまらなくて、結局49年頃になって、じゃあこの辺で朝霧として一発まとめてみるかということになったんです。

――― それがバインターブラックですね。

西原 第一志望はバインターじゃなかったんですよ。まあカラコルムということで意志は固まっていたんだけど、バインターじゃあなかった。京都カラコルムクラブに行って話を聞いたり、サルトロへ行った北稜山岳会の連中と会ったり、いろいろと調べてね、結局シムシャールの方へ行こうということになった。Ｐ７０２５というのを選んだんです。あまり知られていないけど、マラングッティサールというんです。

――― 未踏峰をという意識だったんですね。

西原 ええ、未踏峰でなければ行く気がしません。それで第２志望にバインターブラック、第３に今回のウルタルを持ってきた。当時全部未踏峰ですよ。

――― それで結局バインターに許可が降りて出かけたわけですね。あの時は西原さんが隊長だったわけですが、敗退の原因は何だったと思いますか。

西原 基本的には二つ。トランスポートの失敗と、あと天候ですね。ポーターに逃げられちゃった。それで隊員が荷上げして、時間を喰った。あと登攀にかかってから、悪天候で二週間も停滞したりして、結局時間切れになってしまった。

――― あの頃は、日本隊がまだカラコルムという山域に慣れていなくて、そのためかどうか成功率もあまり高くないんですね。

植田 あの76年って年は、ラトック、バインター山域の元年なんですよ。我々の他にもラトックⅠ峰の泉州、Ⅱ峰の同人志気とみんな敗退した。

――― ポーターに逃げられたというのは、どういうことですか。

西原 当時パキスタンでは、ＢＣの標高に関係なく、ローカルポーターは5,０００までということになっていた。これはブリーフィングでもきっちりと言われたんです。ところが我々のＢＣ位置は約4,０００だった。4,０００で帰られちゃかなわないんで、壁の取り付きまで荷上げさせようとしたんだけど、ここでもめたわけです。我々としてはどうしても荷上げさせる必要があったから、給料を多少値上げして、翌日の分まで払った。番号札も渡して、やれやれと思って眠った。ところが朝になってみると皆逃げたあとだったというわけです。ものの見事にやられちゃった（笑）。

――― それで、隊員が氷河の中を何往復もするハメになったわけですね。でも今回のウルタルはそういった面では楽ですね。

西原 そうですね。ただポーター代が高くてまいっちゃう。

● あくまでも朝霧のEXP.を！

――― バインターからウルタルまで6年あいているわけですね。一時期沈滞ムードになったということですか。

植田 いや、そういうわけじゃない。ただ世代交代があったんです。私が6年前バインターに行った時、会の中ではチーフだったんですが、バインターをやりながら「朝霧はこれじゃだめだ」と

痛感しました。で、帰ったらどうするかという構想をたてたんです。いろいろ具体的な改革をするなかで次の遠征を考えた。そういう意味では敗退してよかったんじゃないかとも思います。成功するとすべてうやむやになっちゃうでしょ。なにしろあの時は朝霧初のＥＸＰだったし、ラトック、バインター元年ということで気負っていて、青っちょろかった。

――― ひとつのプロジェクトを持つことによって、それまで見えなかった組織の欠陥がモロに浮きあがってくるということは確かにありますね。

植田　朝霧山岳会は歴史は古くても層は薄いですから、バインター以後の世代交代というのは、もう必然的なものだった。バインターから帰ってくる時、２年後にまた遠征を出そうと考えていましたが、その世代交代のなかで諸々の改革をやってみると、結局現実的ではなかったんです。新世代の成長と組織としての盛り上がりをじっくり待つ以外になかったですね。そうしていつか６年が過ぎ去った。でも盛り上がりましたよ。ひっかけたわけじゃないですが、たまたま会の創立５０周年とも重なったし。ちなみに僕はもうチーフでもないし、リーダー会の一員ですらない。まったくの一会員です。新しいリーダーが育っていますから。

――― そういう話を聞いていると、単一山岳会として継続的に遠征をやっていくスタイルって、いいなあと思いますね。苦労もあるんでしょうけど。

植田　僕はあくまでも朝霧で遠征をやりたいですね。やっぱり気心の知れた仲間同志の遠征をやりたい。もっともそれしか知らないけど。

――― そういう姿勢ともあいまって、もうひとつ感じられるのは、バインターからウルタルへという山の選び方ですね。ここにもある種の変わらない山登りのスタイルが伺える。

西原　いや、でもウルタルも実は第一志望じゃなかったんです。最初はディスタギールの東峰を考えた。

――― あっ、そうなるとちょっと性格が違うかな。でも、終始一環して未踏峰主義ですね。

植田　もちろんそうです。私は未踏峰じゃなきゃいやです。日本の山でもまず富士山に登らなきゃいけないという考え方です。そのあとに穂高なり剣なりが来る。単なる崖登りは僕のスタイルの山登りじゃない。ヒマラヤの場合でも考え方は同じです。

――― 頂上を大切にするということですね。どうでしょう。隊長さんはこういう独断を下していますが（笑）、他の隊員の方は。

山口　僕はあくまでも内容ですね。頂上よりも登攀の内容。もちろん手をつけられていないところをという意識はありますが、基本的にはまず内容ですね。

西原　あのね、ウチの会の特色なんですけど、さっさと物事を決めないんです。ディスタギール東峰へ行こう！……だけど、ボーランドに登られちゃった。さてどうしよう。こういうことになるとウチの会は先輩も後輩もないですから、ああだこうだ意見百出なんです。

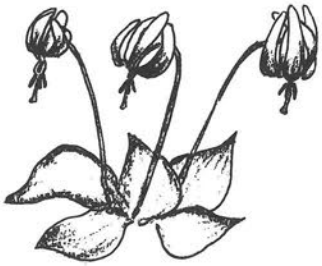
――― すばらしいじゃないですか。そうじゃなきゃ嘘ですよ。私、去年ガンガブルナに若い連中をつれてったんですが、あの隊なんか一から十まで私が決めて、隊員たちはただくっついてきただけ。あんなんじゃ発展がないですよ。

植田　ウチの場合、皆に言いたいこと言ってもらいます。ただし決定にあたっては、多数決なんてバカげたことはしない。私が決めます。

――― 隊の最終意志決定の方法というのは、遠征にあっては最も重要なことですよね。これは出発前に全員が完璧に納得していないと危険だと思います。

植田　その辺はうちの場合絶対大丈夫です。皆が皆を知り尽したうえでチームワークを考えてますから。そして言いたいことは言うけど、隊として採用できないものは私がバッサリ切るし、採用するものはします。その辺のコンセンサスは皆心得ています。こういうことを言っていいかどうか問題もあるけど、いわゆる同人的チームのなかには、そういった面でデタラメな隊もあるようですね。

――― うーん。今の隊長さんのお言葉、一見簡単そうで、実は最も難しいことなんですよね。成功されるよう心から祈ってます。今日はありがとうございました。



キングドン・ウォード (4)

水野 勉

キングドン・ウォードは1924年4月にギャンツェを出発して、ラサの方向へ進んだ。カロ・ラを越えてからヤムドロク・ツォの南岸に沿って東へ向い、ツァンポ沿いの町ツェタンへ出る。ウォードはここからトラップまでは河沿いに進んだが、その後はやはりゴルジュを前進することができず、北へ迂回した。そして、4月末にはギャツァでふたたびツァンポに出た。そこから大体ツァンポの河沿いに進み、5月11日にはギャムダ河との合流点にあるツェラ・ゾンに着いた。ここで三週間滞在して植物調査をおこなってから、ギャラ・ペリへ近いツムバッェ村に本拠を移した。ここからはじめてナムチェ・バルワの白雪に輝やく高峰を見た。

かれらはこの付近で2か月ほどをすごすことになる。ドゥション・ラ付近は植物がたいへん豊富で、シッキム・ヒマラヤの植物よりも、西部シナの植物に密接な関係があることがわかった。7月24日にはナムチャ・バルクに接近すべく、その南西崖にあるナム・ラを登った。ここに登ったのはキングドン・ウォードらがヨーロッパ人としては最初で、ベイリーらも訪れていない。また、キングドン・ウォード以後も誰も近づいていない。このナム・ラを越えて、マンダルティンという僧院へ達したいと思ったが、天候やその他から判断して、その計画を放棄した。その僧院の先にはツァンポーがナムチャ・バルワ山 をぐるっと一回りしてふたたび姿を見せているはずであったのに、残念であった。

それから、かれらはふたたびツァンポ岸のギャラに降り、ロン・チュに沿って北上し、トンキュフから西へ向かいナムブゥ・ラを越え、最後はアツァまで進み、その北方のバンダ・ラへ登った。この辺はすでに知られている土地で、2年前にはペレイラがラサへ行く途中とおっている。ここからギャムダ・チュ沿いにふたたびツァンポー岸のツェラ・ゾンに向った。そこから更に本拠地であるツムバッェに戻った。もう9月15日であった。

9月の後半と10月のはじめにかけては、付近で植物の種子の採集で費やした。ほとんど雨が毎日つづき、ナムチャ・バルワもギャラ・ペリも見られず、1度だけちらっとナムチャ・バルワが眺められただけだった。10月11日にはふたたびツァンポに下り、ペリにおもむき、そこからドション・ラに登った。そこで2週間をすごした。すでに雪の季節であった。10月末にはまたペに戻り、ふたたびナム・ラを訪れた。今度はギャラに下ってからツァンポのゴルジュを進み、ペマコウチュンの部落から先へ進むことにした。そこから先は困難で未知のルートであった。ベィリーらも途中から引返している。その困難なルートを克服してセチェン・ラを越えたときには、12月に入っていた。そして、久しぶりにペイユという部落へ着いた。

そこから、北西へ向って進み、ツァンポーにふたたび出会い、奔流を渡り、カルマ・ラを越え、ルボンに達した。すでに、12月も20日になり、ギャラ・ペリの美しい山容が白く輝いていた。ここからトンキュクまでのルートはベイリーらがとおっている。ここでキングドン・ウォードはギャラ・ペリーを一周したことになる。その後、往路をたどってツェタンへ戻り、南へ向い東ブータンへと帰るが、このギャラ・ペリーの一周は、その後、1938年のシェリフ、ラドロウ、ティラーらがこの付近を訪れたときも、やり得なかったことである。

1924年のツァンポ・ゴルジュの探険について長々と述べてしまい、興味のない方には退屈だっ

たと思うが、キングドン・ウォードの業績中、今でも山に関する未知の領域を開いたことでは、もっとも登山家には興味あることだと思い、つい長長とかいてしまったわけである。

1926年には、1922年に病気のために中断した旅行の後半を完成した。フォルト・ヘルツからナム・タマイ川へと戻り、それからディブルク・ラ経由でローイト谷へと進んだ。この地域は全くの処女地であった。ナム・タマイ河谷と低地域は、ぎっしり生えたジャングル地帯で、湿気の多い気候のため、土地の大部分は完全に無住である。一つ山を越えれば、気候は良くなり、湿気はずっと少なくなる。この現象についてウォードは次のように書いている。

「イラワジ河とローイト河との間にある分水嶺に登っていくと、気候はより乾燥的になる。植物についてもこのことがはっきりわかる。もっとはっきりしているのは天候で、その谷の上部へ登ると、自分自身が元気回復するのさえ感じられた。6月と7月に何回かあったことだが、13000フィート以上に登って、明るい日射しを浴びて振り返ると、自分のキャンプの上におおいかぶさるように雲がいっぱいに見られた。しかし、雲霧も11000フィート止りで、そこから上には何かで押さえつけられているように昇ってこなかった。じっさいに峠の上には乾燥した風が吹き渡っていた。

ここでは山脈がもっとも重要な気候的障壁であった――アジアの乾燥した中心部と湿気の多い丘陵地帯とをへだてる大スクリーンの一部であった。」

北部ビルマの多くの植物がなぜ庭園で栽培されてないかという理由は、上記の文章をみれば明確にわかるであろう。かようにひどい湿気のある場所で庭園仕事を楽しみとする者などけっしていないのである。じっさいの降雨量からいえば、世界各地にはもっと大きいところがあろうが、北部ビルマにおいては、雨が降ろうが降るまいが、大気はつねに飽和点に達しているのである。

ウォードはチベット側の植物にすっかり夢中になった。針葉樹とシャクナゲの群落とがひろがりその間にはブリブラとケシの花で埋まった草原があちこちに点在していた。

チベットの南東隅にあるリマから、ウォードはフォルト・ヘルツへと戻ったが、2人の従者には逃げられたし、この地域はまたほとんど部落のない土地だったので、全くひどい旅行だった。新しい従者と食料とを補給して、かれは種子を採集するためにナム・タマイ谷へ戻り、ローイト谷へと越え、更にサディヤへと下った。

かくして、ウォードはアッサムおよびビルマとの国境山脈のチベット側の植物や地理や気候などにすっかり心を奪われたので、翌年にはミシュミ丘陵への探査をひろげた。

1929年に、ウォードはフランス領インドシナにいた。1930－31年には、かれはふたたびナム・タマイ河谷へ入り、アドウン谷の南東チベットへと越え、それから元来たルートを戻った。

1933年と1935年には、南東チベットでより広範囲な探検をおこなった。1937年にはふたたびフォルト・ヘルツの南西のいつも採集場所、ナム・タマイ河谷、アドゥン谷などにふたたびやってきた。しかし、今度はずっと北へ向い、ガムラン谷の源頭にあるカ・カルポ・ラジを訪れた。それから同じルートで戻った。このカ・カルポ・ラジという名はこの現在でも未踏地域である北部ビルマに興味を持っている人ならよく知っているであろう。たぶん、深田久弥氏の「ヒマラヤの高峰」にも書かれていると思う。やがて許可でも下りれば、どこかの隊がいち早く登る山であろう。

1938年には、かれはふたたびアッサム・ヒマラヤにいた。1939年にはビルマ、シナ国境山脈へとはるか南に戻った。1937年から1939年にかけての旅行は、かれの著書Burma's Icy Mountains によく書かれている。もっとも、アッサムについては、Assam Adventure という本を出している。1938年から1939年にかけてこの北部ビルマ旅行はアメリカ遠征隊と同行して、ガイドの役目を果たしている。

戦後になって、1946年にはアッサムのカシ高原、1948年にはやはりアッサムの東部マニプールに入った。この二つの旅行はそれほど地理的未踏地域には入らなかった。1948年のマニプール行はトフライから出発し、ウクルルに本拠を置いて純粋に植物採集に従事した。

AFIA

全世界のネットワーク

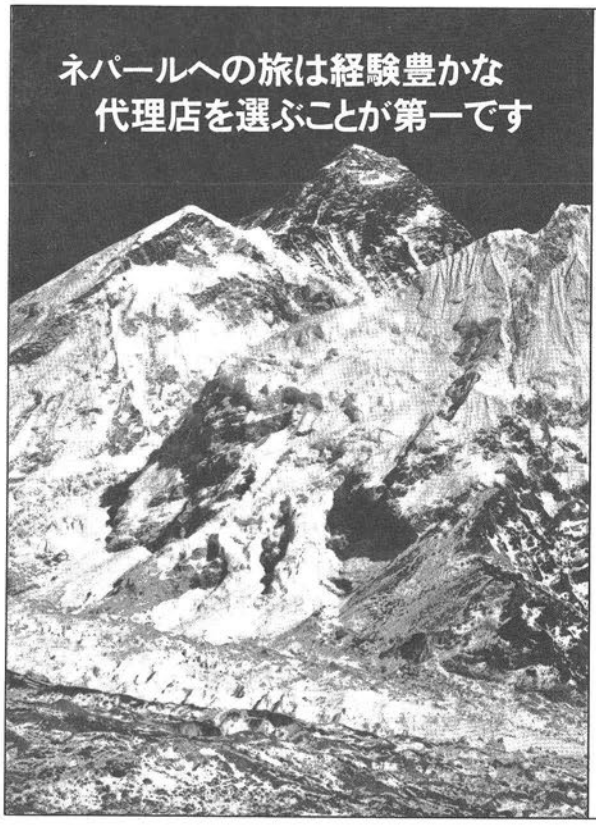
AFIA ホーム　保険会社

海外 山岳保険

※凍傷・ヘリコプターチャーター料等も支払います。
※例 4ヶ月間の場合＝死亡100万円、救援者費用100万円で25,520円です。
※詳細は下記へお問い合わせ下さい。

取扱代理店
郷インシュランス・コンサルタント
〔ホーム保険会社代理店〕
〒100 千代田区丸ノ内3－1－1
国際ビル8F
TEL. 03－281－2981

相　談　所
ホーム保険会社首都圏支店
〒100 千代田区丸ノ内3－1－1
国際ビル8F
TEL. 03－211－4401
担当：寄木康男(ヨリキヤスオ)



■ヒマラヤ観光開発㈱はネパール政府観光局指定インフォメーションセンター、ネパール航空日本地区販売代理店に指定されております。

■ネパールへの個人旅行／トレッキング／パッケージ・ツアー／トレッキングで登れる18峰／登山の計画等、あらゆるご相談に経験豊富なスタッフがおりますので、安心しておまかせください。

■ネパール国内ではトランス・ヒマラヤン・ツアー社／ホテル・エベレスト・ビュー／日本航空総代理店の業務を行なっております。

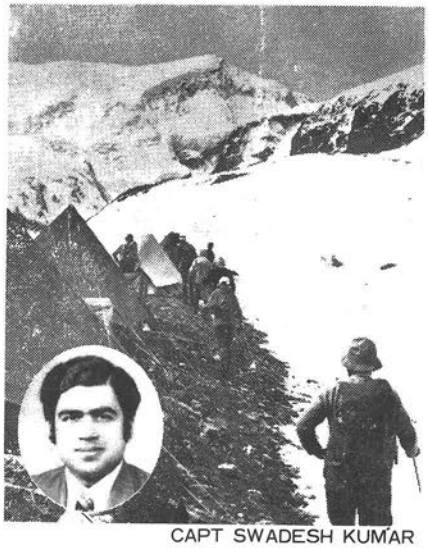
ヒマラヤ観光開発株式会社
〒105 東京都港区新橋3丁目26番3号 会計ビル 5F
電話 03 (574) 9292～4

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

"魅惑の インド・ヒマラヤ"

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,
26 barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE
Branch office:Gangtok
Camp office:Joshimath & Uttarkashi

ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

★ インド政府許可証
★ 通 関 手 続
★ 交 通 機 関
★ ポ ー タ ー
★ ハイポーター
★ デラックス食料賄い
★ テント宿泊用具
★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.
F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India
Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表
ファー イースト エンタープライゼス
東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル ☎407－8100(代表)

■寸感■

八ケ岳の遭難事故では折から'82年クン登山学校の合宿中とあって大変驚かされました。山の危険は判りません。これからの春山にご用心！(O)

事務局日誌（3月）

11日（木）　'82年クン登山学校集会
14日（日）　福岡ヒマラヤ会議（山森）
19日（金）　理事会（稲田、内田、小林、清水、角田、堀内、山森）
20日（土）～22日（月）　'82年クン登山学校第三回合宿（於：八ケ岳）
21日（日）～22日（月）　ブリグティ登山隊合宿（於：HAJルーム）
28日（日）　阿部家密葬（於：横浜、小島、山森、佐久間）
29日（月）　東京ヒマヤラ集会(11名)

ヒマラヤ No.126（5月号）

昭和57年4月10日印刷　57年5月1日発行
発行人　柴田金之助
編集人　尾形好雄
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒160　東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン（7,135m）

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるパック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマヤラ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行なっており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実施している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

・1977年　タルコット（6,099m）
　（JACに協賛して行なった）
・1978年　ヌン（7,135m）4名登頂
　トリスルI峰（7,120m）6名登頂
　II峰（6,690m）7名登頂
・1979年　キャシードラル（6,400m）6,000mまで
・1980年　ケダルナート・ドーム（6,831m）19名登頂
・1981年　ナンダ・カート（6,611m）事故のため断念
・1982年　クン（7,077m）　現在準備活動中

実施要項

目的　①ヌン（7,135m）登頂
②高所登山の基礎修得

時期　1983年7月末～8月末（35日間）

負担金　71万円（航空運賃の変動等により変ることもあります）

定員　20名
インストラクター4名（医師含む）

申込み　1982年6月末までに下記宛に申込むこと（資料を送ります）
〒160 東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506号日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、㈱西遊旅行が担当します。一般旅行業 607号

カラコルムセミナートレッキング隊員募集

ＨＡＪではこれまでネパールヒマラヤで五百沢智也講師のもとにセミナートレッキングを実施してきましたが、このたび「この催しをパキスタンでも!!」という要望に応え、下記のような計画を組みました。

コーランの読経と炎熱の砂漠、コバニーの実るオアシスの憩い、そして豪快なカラコルムの氷河をあなたも歩いてみませんか。

実施要項

目　的　西部カラコルムバツーラ山域の踏査及び五百沢智也氏の指導による野外調査活動

時　期　1982年7月26日～8月15日

負担金　43万円（航空運賃の変動等により変ることもあります）

定　員　20名（申込順）

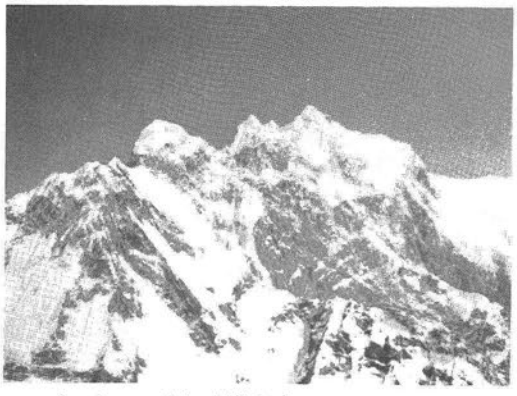
講　師　五百沢智也、他1名

申込み　1982年4月末日までに下記に申込むこと（資料を送ります）

〒160東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506　日本ヒマラヤ協会
TEL 03-367-8521

踏査コースと日程

7／26（月）　東京 $\xrightarrow{\text{PIA}}$ イスラマバード
7／27（火）　イスラマバード滞在（山行準備）
7／28（水）　イスラマバード $\xrightarrow{\text{バス}}$ ギルギット
7／29（木）　ギルギット $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ バール
7／30（金）　バール→ボラダス谷→シュエー
7／31（土）　シュエー→バルタール氷河→バルタールのカルカにB・C設置
8／1（日）　B・Cにて休養
8／2（月）　バルタール→ＨＡＪ '78 バツーラ B・C
8／3（火）　ＨＡＪ'78 B・C→バルタール
8／4（水）　バルタール休養
8／5（木）　バルタール→バール



▲バルタール氷河左岸の山々

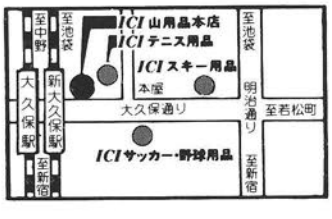
8／6（金）　バール $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ チャルト $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ フンザ
8／7（土）　フンザ滞在
8／8（日）　フンザ $\xrightarrow{\text{バス}}$ ギルギット
8／9（月）　ギルギット滞在
8／10（火）　ギルギット滞在
8／11（水）　ギルギット～イスラマバード
8／12（木）　イスラマバード（ラワルピンディ）滞在
8／13（金）　イスラマバード（ラワルピンディ）滞在
8／14（土）　予備日
8／15（日）　イスラマバード $\xrightarrow{\text{PIA}}$ 成田

――締切り迫る！――

ヒマラヤへの装備

⊙遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2 — 2 — 3 ☎03 (208) 6601㈹
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1 —16— 7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 —14☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2 — 8 — 6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2 —123☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2 —19—10東和ビル内☎03 (200) 7219

昭和五十一年五月第三種郵便物認可　月刊「ヒマラヤ」五月号　昭和五十七年五月一日発行　通刊百二十六号　発行　日本ヒマラヤ協会　定価五百円